

竹川忠男先生を偲んで

稲田 尚史（北翔大学人間福祉学部）

平成18年6月30日、竹川忠男先生が急逝された。本学人間福祉学部創設時より様々な場面でご指導を仰いできた我々にとって、その知らせはまさしく青天の霹靂で、大変な驚きと悲しみであるとともに、まだまだ多くのご指導・ご助言ををいただく必要があっただけに、誠に痛恨の極みである。

竹川先生と私との出会いは、本学部創設よりも遙か遠く、今から三十年近く前のことである。当時、北海道大学文学部の学生であった私は、聴覚心理学の授業で先生と初めて出会った。札幌医科大学の助教授であった先生は、やや伏し目がちに訥々と、また、時にユーモアを交え聴覚に関する興味深い話をなされ、我々学生はその話に引き込まれたものである。思えばこの出会いが、その後の竹川先生と私の長いおつきあいの始まりであった。

竹川先生の講義を初めて受けたのは、おそらく学部3年の時分ではなかったかと思う。当時の私は、動物を用いた生理心理学に興味を持ち、動物舎に住んでいると言っているほど入り浸っていたが、元々音響心理学に興味を持っていたこともあり、竹川先生のお話によって音の不思議に対する興味を再びかき立てられていた。

その後、縁あって学部4年次から大学院に至るまで札幌医科大学の先生の研究室で聴知覚と事象関連電位に関する研究をご指導いただいた。実験では先生自らも被験者を多数されており、私の実験の被験者もつとめていただいたことが幾度となくあった。先生の頭頂部には度重なる脳波電極の装着によって、電極と同じ大きさに「電極ハゲ」が出来上がっており、髪の毛をかき分けつつ電極を装着しなければならない一般の被験者に比べ、電極の装着が容易で、初心者の中には大変助かったものである。私は幸か不幸かそこまでの被験者歴を経なかったため、そのような電極ハゲを作るには至らなかった不肖の弟子である。

当時の私はとにかくマイペースであり、集中して実験しているかと思えば、ふっとどこかへ行ってしまうような、あまりまじめではない学生であった。さぞご心配をおかけしたものと思うが、竹川先生はそんな私を叱責することはなされず、実験室や控室にいるところへ顔を出され、「(実験や論文の進行は)どんな具合ですか?」と尋ねられるのみであった。いつも穏やかに尋ねられるのであるが、さぼっているときはその一言が非常に恐ろしく、また表情も厳しく映ったものである。また、論文の作成では下書きをお渡しすると、それこそ真っ赤に添削

されて戻ってきて、私はそれをまた清書するのが大変で、陰で愚痴をこぼしたりしていた。今にして思うと、先生には大変な時間と労力を割いていただいていたのであり、誠に恥じ入るばかりである。とにもかくにも、研究者として駆け出しの私を、温かく見守りつつ育てていただいたことは筆舌に尽くしがたく、改めて感謝申し上げたい。

竹川先生のご専門は、もともとは聴覚心理学である。先生は昭和34年に北海道大学大学院文学研究科心理学専攻を修了されたが、当時北大に在職され後に東大教授とられた大山正先生や、後に九州芸術工科大学（現、九州大学芸術工学部）教授になられた寺西立年先生などのご指導を受けられた聞いている。それぞれ、知覚心理学、音響心理学の大御所の先生方である。大学院修了後直ちに北大助手に任ぜられ、昭和41年からは札幌医科大学に奉職された。札幌大では、杉山善朗先生と、まさしく二人三脚で教育研究に力を尽くされた。そして、平成8年7月より北海道女子大学（現、北翔大学）設置準備室に赴任され、平成13年には福祉心理学科の創設とともに初代学科長として本学の発展に多大な貢献をなされたのである。

先に、先生のご専門は「もともと」聴覚心理学である、と書いた。「もともと」と書いたのには訳があり、先生が様々な分野でその才能を発揮されてきたためである。先生は、私が札幌医科大学心理学教室にお世話になった頃は、聴知覚をベースとしながらも、脳波の一種である事象関連電位の研究に没頭されていたし、その前は医大の解剖学や生理学教室でモルモットの内耳の電気生理についても研究されていた。また、杉山先生との共同研究ではMPI日本語版の作成をはじめとする臨床心理学領域や高齢者の生きがいに関する研究など多岐に亘って業績を残されている。さらに、コンピュータや統計学にも滅法お強く、北大に大型計算機センターが設置された当初より運営委員を務められ、札幌大でも学内の電算化にあたって大変な重責を担われたと聞く。統計学は心理学を研究するものにとって必須の領域ではあるが、元を質せば数学であり、使えはするが原理原則まできっちり理解しているかと問われると答えに危うい研究者が、私を含め多いのではなかろうか。竹川先生は、そのような中であって、統計学を理論からしっかりと理解されており、またそれを我々のようなものにもわかりやすく説かれる術をお持ちであった。また、様々な実験装

置を作製されることも多く、今ではコンピュータによる制御が当たり前となっている、様々な刺激の発生装置などを半田ゴテ片手に自作される姿もよく見かけた。このように、竹川先生は非常に多才であり、かつ、そのどれもを究めておられたように思う。

趣味においても多芸であって、専門の音とのつながりからか、音楽がたいそうお好きで、クラシックのコンサートによく出かけられていた。また、オープンリールテープの時代から録音されたライブラリは膨大な量であった。音楽をお聴きになるだけではなく、尺八やフルートなどを物され、結婚式などで披露されたこともあったようである。あまり知られていないところでは、鉄道にも関心がおありで、寝台特急北斗星が運行をはじめてしばらくたった頃、東京での学会への往路、私と偶然乗り合わせた際に、「一度乗って見たかったのだ」と大層ご機嫌でいらしたことが思い出される。酒席などでは、そのような趣味のお話や学生時代のいたずらの話など、豊富な話題で老若男女を問わず、常に私たちを楽しませて下さっていた。

このような先生の訃報を受けたのは、亡くなられた当日の午前中であった。第一報は北方圏学術情報センター

長（当時）の山田真知子教授からの大学研究室への電話であった。竹川先生は数日前に大学にお越しになっていた、検査のためにしばらく入院されると仰っていたのを伺ったばかりであったので、私は何度も事実確認を行い、それでもなお信じられずに、各方面に確認の電話をかけた。午後になって、ご家族と連絡がとれ、杉山先生とともにご遺体と対面するまで、それが現実とは思われなかったのである。

後にご家族にお伺いしたところ、胃に小さな病変があったため、切除の手術をされ、成功裡に終了したのではあるが、手術中の循環の変化で生じたらしい異物によって数時間後に冠状動脈が塞栓し、心筋梗塞を生じてお亡くなりになったとのことである。ご本人はもとより、ご家族も予期し得なかった死であった。

まだまだやりたいことがたくさんおありであったであろうと思うと、無念の思いを禁じ得ないが、先生の思いと教を胸に、我々一同、本学の発展と教育研究に力を注いでいきたいと決意を新たにすところである。

竹川忠男先生のご遺徳を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

竹川忠男先生 略歴

昭和9年7月24日	大阪府生まれ
昭和32年3月	北海道大学文学部卒業
昭和34年3月	北海道大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程修了
昭和34年4月	北海道大学文学部 助手
昭和41年4月	札幌医科大学専任講師
昭和46年12月	札幌医科大学助教授
平成7年3月	博士（行動科学） 北海道大学より授与
平成8年7月	北海道女子大学設置準備室特別参与 北方圏生活福祉研究所教授・副所長（～平成9年3月）
平成8年12月	北海道女子大学（現北翔大学）人間福祉学部教授
平成10年4月	教務部長（～平成12年3月）
平成12年12月	福祉心理学科長（～平成16年3月）
平成13年3月	定年により退職
平成13年4月	人間福祉学部特任教授 大学院人間福祉学研究科特任教授

平成18年6月30日ご逝去

学会・社会的活動（任期省略）

日本心理学会理事 日本生理心理学会運営委員
日本老年社会科学会運営委員
情報処理学会北海道支部運営委員
北海道心理学会会長 他、多数

